

# 第7回 土佐の皿鉢ゼミ開催

（同期型オンラインZoomによる開催）

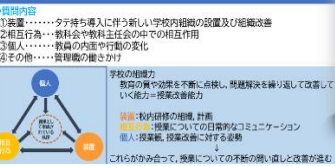
教職実践高度化専攻（教職大学院）院生の実践研究発表「第7回土佐の皿鉢ゼミ」が、新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から2021年8月18日（水）に、同期型オンラインZoomにより開催されました。まず柳林信彦専攻長より挨拶があり、高知県教育委員会教育次長 菅谷 匠氏による「新時代に向けた教育改革の動向と高知県教育大綱について」と題した講話をいただき、本専攻で学ぶ院生の研究に対する期待が寄せられました。ここでは、皿鉢ゼミで発表した院生から、それぞれの研究課題におけるこれまでの成果と今後の課題を語ってもらいました。



## 【学校運営コース】

### M2 石川真美さん 中学校における組織力を高めるマネジメントの在り方

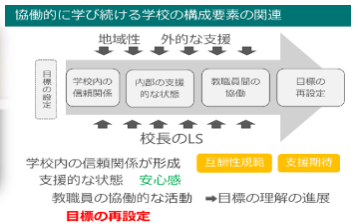
#### 6. 令和3年度を取組調査方法



授業改善に努め組織化を図っている3校に協力を得て、組織化要因の理論を基に調査を行いました。質問紙から「相互信頼」「リーダーシップ」の高さ、面接から教科会の議題の精選、管理職の行動化が共通点として見られました。今後調査で得た具体的手立てを実践で行い、研究を継続していきたいと思っております。

### M2 中澤悠子さん 協動的に学び続ける学校を実現するための方策を探る

昨年度の実態把握から「協動的に学び続ける学校」の実現には学校の目標の共有、教職員が学びに向かうゆりの確保、全教職員が教育実践を通して必然的に関わる場の創造が必要であると考え、その具体的方策の実施を進めています。今後はその有効性を検証し、より効果的で汎用性の高い方策の提案を目指します。



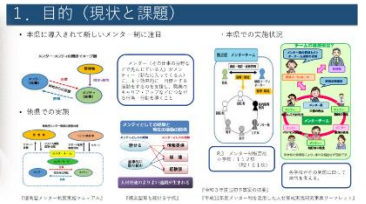
### M1 能勢朋典さん 業務改善を通じた自律する学校組織の構築



本研究では、学校が抱える問題を教員らで抽出し、改善方法を模索し、自ら組織的に改善していく組織づくりを目的としています。また、組織化と合わせて、学校の内部リソースを効果的・効率的に活用していくことで、業務改善を進めていく方策を研究していきます。

### M1 横山美佑紀さん 教師の力量を高めるための小学校組織の在り方

本研究は、メンター制度に焦点を当て、主体的・協動的に力量を高めていける学校組織になるための要素や条件を明らかにし、提言することを目的としています。今後、県内の小学校のメンター制の実態状況及び、効果等について調査を行い、効果的なメンター制についての実践的アプローチを進める予定です。



## 【教育実践コース】

### M2 畔元杏奈さん 中学校における「考え議論する」道徳授業の在り方～自己決定力の育成を目指して～

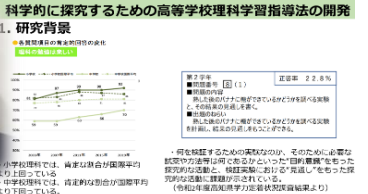
#### 2. 理論的枠組みと研究の方法論



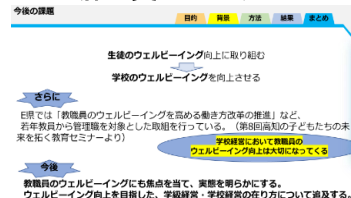
自身の考えを表明・議論し問題解決を図る授業実践及び成果の検討から、自己決定力を養う道徳授業の在り方を明らかにすることが目的です。道徳と特別活動を組み合わせ、体験と関わらせて思考を深めていくことは道徳授業における思考意欲や自己決定意欲の上昇にも有効であることが伺えました。

### M2 岩原朋史さん 科学的に探究するための高等学校理科指導法の開発

高知県学力定着状況調査により、目的意識をもった探究的な活動および、検証実験における見通しをもった探究的な活動の実現が課題として示されました。これを受け、探究過程における仮説設定場面に着目し、生徒自らが見通しと振り返りを行うための高等学校理科学習指導法を検討しています。



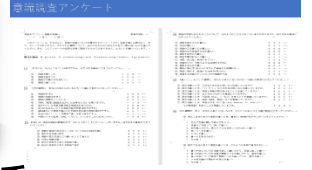
### M2 加藤 翼さん ウェルビーイングを高める学校経営の在り方に関する研究



生徒のウェルビーイングに焦点を当て研究を進めてきました。ウェルビーイングとを感じる場面を多く記述できる生徒はウェルビーイングが高い可能性が示唆されました。今後は生徒のウェルビーイング向上を目指し介入を行うこと、また教職員のウェルビーイングにも焦点を当て実態を明らかにしていきます。

M2 笹岡久乃さん 言語活動を通し4技能育成を図る授業改善の工夫～書く力を養う英語科の教材及び学習指導の開発～

実施したアンケート調査から、音読に困難を感じている生徒が多いことが示されました。生徒は書く活動以前の段階でつまずいています。そのため、英語の語順の定義を図ることを意識した音読指導を行うことにより、生徒の書く力の向上につながる授業開発を進めていきます。



M2 嶋村明日華さん ICTを活用した「深い」学びを実現する授業開発～複式学級の性質をふまえて～



本研究では、「コミュニケーションツール」としてのICTを活用し、他校との国語科の遠隔授業を実践し、教育的効果について分析・考察を行いました。ICT活用により必然性のある言語活動の場を設定し、作成した評価規準で児童の評価や指導に生かすことができました。今後は一人一台タブレットによる授業実践を進めていきます。

M2 田邊元基さん 数学教育における深い学びを実現する授業の研究～統合化をめざした授業～

本研究では、数学教育における深い学びを実現するために統合化の活動を生徒に主体的にさせるような授業デザインを考案することが目的です。そこで、統合化を捉える枠組みを「普遍化」「拡張化」「補完化」「組織化」の4つに設定し、今回は「拡張化」の視点から授業をデザインしました。

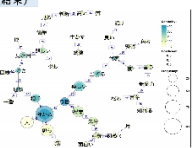


本研究での統合化の分類

本研究での統合化	中島による統合化	古藤による統合化
普遍化	集合による統合	普遍化
拡張化	拡張による統合	拡張化
補完化	補完による統合	
組織化		止揚化

※記号化や一般化、抽象化は、統合化と密接な関係にあり、上記分類のすべての基にある活動と考えている。

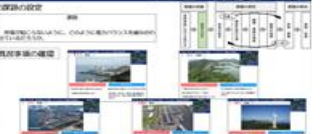
M2 戸梶良輝さん 望ましい友達関係を目指した教育支援プログラムの開発～ピア・サポートの視点から～



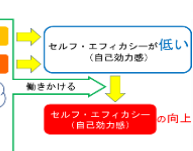
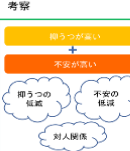
不登校の未然防止・早期解決のため友達関係に着目し、ノンバーバルの視点から友達の気持ちを考えるプログラムを実施しました。その結果、ノンバーバルな視点から友達の気持ちを理解できることについての知識理解を促進できたことが示唆されたため、今後はバーバルな視点からプログラムを実施します。

M2 徳橋佑哉さん 高等学校における生徒の認知特性と理科実験における考察が学力向上に及ぼす効果の検討

高等学校において仮説検証型授業を実施した場合、実施前後において生徒のポジティブ感情が向上し、有意な差が見られました。学年によっては、思考活性志向低群よりも高群の方がテスト得点の減退が見られました。今後は、理科の学習行動や学習方略についても検討し研究を推進していきます。



M2 戸田哲寛さん 児童生徒理解に基づく開発的生徒指導の進め方～セルフ・エフィカシーに着目して～



生徒指導の介入プログラムについて研究しています。前期は実態把握を多面的に行うため、小学生の不安や抑うつ、及びセルフ・エフィカシーの特徴について検討し、不安・抑うつ双方が高い児童のセルフ・エフィカシーが低いことが分かりました。後期は介入プログラムの作成、実施及び検証を行います。

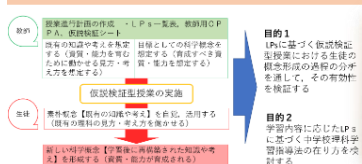
M2 中村彩乃さん 数学的活動を軸とした数学授業について

「変化させても変わらないもの（不変性）＝数学的性質」であり、不変性を探究することは、数学的活動の本質であると捉えました。今回、文字式の活用の領域で、不変性を探究するような授業をデザインし、実践しました。今後は他の領域でも不変性を探究していく授業を考え、実践していきます。



2. 数学における不変性の探究について  
「幾何学的性質は主観の変換に対する不変性によって特性づけられる」  
……プログラムのエッセンス・プログラム  
不変性の探究は、幾何学の探究のみならず、すべての数学的領域において本質的な数学的活動である。  
また、数学教育での探究活動を考える上でも、非常に重要なものである。  
探究問題の条件を変化させながら  
変化していない部分（不変性）や共に変化している部分（共変性）を見つけ、  
文字式を使って不変性や共変性を形式化し、そのような数学的活動をデザインする

研究の概要



M2 若松柚似さん 理科の見方・考え方を働かせた科学的に探究する学習指導の在り方



本研究では、ラーニング・プログレッションズ（LPs）の手法を参照し、生徒の概念形成状況の把握を基盤とする仮説検証型授業の在り方を検討しています。LPsに基づく仮説検証型授業を構成し、実施することで、生徒は課題意識を持ち、主体的に科学的な探究を行うことにつながりました。

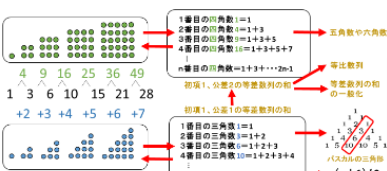
M1 北沢佳祐さん 学びの質を高めるための授業準備・方法について

子ども達の学びの質を高めるために必要なことを焦点化し、子ども達が主体的に学習に取り組むための教師の工夫について検討しました。分析の結果、教師の子どもへの役割や出番の設定によって主体性が高まるということや、子どもの気づきは子どもの主体性に関わっているということが示唆されました。



- 考察
  - ・教師が子どもに役割や出番をもたせる働きかけを行うことによって授業における子どもの主体性が高まるという仮説
  - ・授業における子どもの気づきは子どもの主体性に直接的に関わって感嘆詞として表れるという仮説
- 今後の課題
  - 授業観察や教師との話し合いの結果などに基づいて仮説を吟味し検証し適宜再構成していく。そして、子どもの主体性を高めるために子どもを信頼し子どもに何を任せるかが具体的にどのような教師の言動に表れるかを明らかにしていく。また、子どもの気づきの表れを感嘆詞以外にアプローションにも着目して探っていく。

数学的豊かさの探究（三角数について）



M1 鈴江暢朗さん 数学的な見方・考え方を育成する本質的学習場の構成

E. Ch. WITTMANNの本質的学習場の考えに基づいた中学校における本質的学習場の開発を目的として、教材の開発・研究や授業デザインの考察を行っています。生徒も教師も多くを学べる豊かな教材の探求を、教材研究を主軸とし行っています。

M1 中越和奈さん 既習の文法を使い、自分の考えを英語で書く言語活動の研究

高校生を対象にした、文法の基礎基本の定着を図るためのポートフォリオを開発しています。ポートフォリオに対して肯定的な意見が多いですが、取り組む際につまづきやすい箇所があるので、改善しながらよりよいものにしていきたいと考えています。



1. ポートフォリオの概要

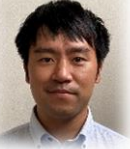
①説明
Portfolioの概要
目的
目的の達成
達成の振り返り

M1 畠中憲太さん 不登校を未然に防止する学級づくり～教師の表情が学級雰囲気と与える影響のSimulation解析～

研究の方法「シミュレーション」
Multi-Agent Simulation (MAS)を用いた解析
MASとは・・・

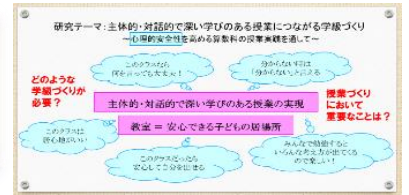


不登校問題の解決に向けて、学級経営に役立つ教師の働きかけについて研究しています。研究ではMulti-Agent Simulation (MAS) の手法を用いてPC上に仮想学級をつくり、学級の様子をシミュレートしています。今回は、学級雰囲気に好影響を与える教師の表情について分析しました。



M1 松山起也さん 主体的・対話的で深い学びにつながる学級づくり～心理的安全性を高める算数科の授業実践を通して～

主体的・対話的で深い学びのある授業を実現するためには、学級の心理的安全性が重要だと考えています。そこで、まずは学級の心理的安全性を測定する尺度を作成し、分析した結果、心理的安全性は「安全な社会的環境」と「自発的な行動」の2因子構造であるという結論に至りました。



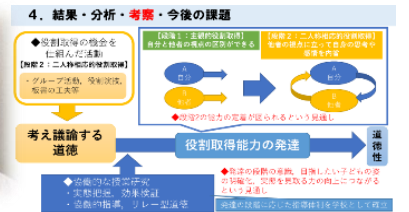
M1 水口 落さん 複式学級におけるICTを活用した授業の研究

複式学級における効果的な授業を提案することを目的として、コミュニケーションツールや思考ツールとしてICTを活用した授業実践を行いました。今後もICTを効果的に活用した異学年でも統一して実践できる教材・テーマ及び学習方法の開発に向けて、研究を進めていきたいと思ひます。



M1 宮崎奈苗さん 考え議論する道徳を目指した協働的な授業研究～役割取得能力の育成に焦点を当てて～

本研究では、見取りの判断が容易ではないといわれている道徳性をセルマンの提唱する役割取得能力の発達を基に焦点化し、その発達の段階に応じた考え議論する道徳の在り方を明らかにすることとしました。また、児童の道徳性を育むための協働的な授業研究の在り方についても検討します。



【特別支援教育コース】

M2 島崎やよいさん 支援が必要な児童への効果的な支援方法～通常学級における支援が必要な児童への効果的な支援方法の検討～

II 理論的枠組み・研究の方法論提案UDモデルを中心にすえて

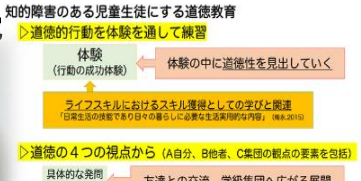
- ① 授業でのユニバーサルデザイン（UD）の視点を担任が把握
② 学習につまづきのある児童への一斉授業での効果的な個別支援

UDモデルの図解と授業実践の事例

通常学級における支援ニーズのある児童が学級で学習をすすめるために、授業でのユニバーサルデザインの視点を担任が獲得し安心できる学級づくりを推進すること、学習面につまづきのある児童の原因に応じた一斉授業での効果的な支援方法を若年教員のコーディネーター役となり研究を進めています。

M2 土居一平さん 知的障害特別支援学校におけるライフスキルの視点に基づいた道徳の研究

知的障害教育における道徳教育では、体験を通して、行為や成功体験に道徳性を見出ししていくことが重要だと考えます。これはライフスキルにおけるスキル獲得としての学びとも関連します。今後は、道徳授業担当者への聞き取り調査、教材の活用等についても検討していきます。



M1 大島勲仁さん 高等学校における SST の実践的研究～発達障害のある生徒への認知行動療法に基づく SST の効果～

VI 支援方針

Table with 5 columns: 個人要因, 先行事象, 行動, 結果事象, 行動の帰結. It details the components of SST for students with developmental disabilities.

高等学校の生徒を対象に、授業中での適切ではない行動の背景を機能的アセスメントによって把握し、本人の SST と環境調整を図ることでより適切な行動を身につける指導実践を行っています。通常の学級と通級指導教室とが連携して指導をすすめるにはどうすればよいか考えます。



M1 楠瀬陽子さん LD-SKAIPによるアセスメントに基づいた読み書きが苦手な児童への支援

読み書きにつまづきのある児童の早期支援を実現するために、早期発見の手がかりとなる指標の検討やLD-SKAIPの結果に基づいた読み書き指導を行います。個別指導によって得られた効果的な指導方法は、通常学級の学習でも活かせるように授業のUD化として提案したいと考えています。



LD-SKAIPのスクリーンショットと特徴説明

3 結果【④支援会・ケース会の実施】

	支援会	ケース会
対象	全校生徒	個人
内容	学年会の記録を資料として全校生徒の報告・共有 2ndステージ支援対象生徒についてはニーズを把握 クラス全体への1stステージ支援、個への補充的な2ndステージ支援について報告・共有・検討	2ndステージ支援対象生徒の個別の事例に対し、支援者とチームとしての役割分担を決定する
参加者	管理職+各学年団より1人 +特別支援教育コーディネーター	管理職+担任+他学年団より1人 (内容によっては教科担任) +特別支援教育コーディネーター (SCやSSWが入る場合もあり)
実施日	6/11・7/9	6/18・6/29・7/13

- ・学力向上に対する生徒・教師の困り感の明確化
- ・学級担任への負担の集中を避ける

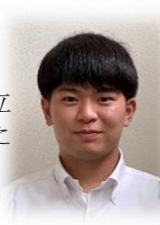
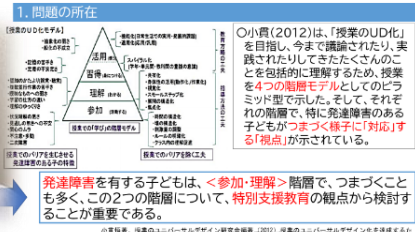


M1 古味 梢さん 特別な支援が必要な生徒に対するチーム支援

中学校における生徒のニーズを把握し、教職員のチーム支援体制を構築することを研究の目的としています。複数の質問紙による実態把握を行い、結果を基に支援会等を運営しました。今後は、会の中で明確化した学力量向上に対する困り感解消のため、適切な支援方法を研究していきます。

M1 廣瀬 空さん 小学校における個の学びを保障する学習指導の検討

段階的支援や高知県の授業ユニバーサルデザインの5つの柱を念頭に、通常学級における追加的支援が必要な児童の参加と理解を促す教師の手立てについて検討しました。今後は、支援の具体的内容をさらに検討するために、量的分析のみならず質的な分析にも取り組んでいきたいです。

1. 問題の所在

「授業のUD化」を目指し、今まで議論されたり、実践されたりしてきた皆さんのことを包括的に理解するため、授業を4つの階層モデルとしてどの層で、特に発達障害のある子どもが「つまづく様子」に「対応」する「視点」が示されている。

発達障害を有する子どもは、＜参加・理解＞階層で、つまづくことも多く、この2つの階層について、特別支援教育の観点から検討することが重要である。

【各コース別・テーマ別協議内容】

【学校運営コース】院生が共通して「目標の共有」の弱さを学校の課題として挙げていることを踏まえ、参加者から「なぜ目標が共有されないのか」という協議のテーマが示されました。すでに多くの先行研究において組織における「目標の共有」の重要性は明らかにされており、また研修等でも扱われていることを踏まえれば、それは教職員に広く知られていることであるといえます。しかし、それでもなお多くの学校がこの課題を解消できずにいるのはなぜなのか、それは本コースの院生の研究の根本にかかわる問いでもあります。院生からは、目標の質や目標そのものの意義の問題、抽象的表現を具体レベルで解釈し実践につなげる教員のスキルの問題等が、参加者からは学校のPDCAサイクルの問題、とりわけCheck機能の弱さ等が出されました。協議を通して、そういった諸課題を解決するための方策を理論と実践の両面から追究し、多くの学校において活用できる形として提案することが重要であるということを確認しました。

【教育実践コース】（学級経営）学級経営のグループでは、3人（北沢、畠中、松山）の研究をそれぞれこれからどう深めていくかということを中心に、意見や質問を出し合いながら議論しました。意見交流をする中で、自分の研究を最終的に現場でどう生かすのか、具体的なイメージを持つことが重要であることを確認しました。また、「教師がどのようにふるまうのか、教師側がどのような仕掛けづくりをしておけばよいのか」という共通点をもとに話し合い、互いの研究について知れたことで、これから研究を進めていくためのよいヒントを得ることができました。

（生徒指導・道徳）生徒指導・特別の教科道徳のグループでは、「高知県における『徳』の分野の状況を改善するためのアイデアは？」をテーマとして、院生からの話題提示や、各学校の具体的な取組についてフロアの方々と意見交流をしました。組織的に生徒指導や道徳を取り組むことの重要性が話し合われ、「複数担任制など、学級経営を複数の教員で行うことが組織的に学級を考えていくことにつながる」、「校長先生のリーダーシップのもと、組織的に取り組む仕組みを作って行く必要があるのではないか」という意見が出され、組織的に取り組むための方策について共有しました。

（教科教育）高知県の学力向上に関わる課題と改善の方法について、①各教科（理科・数学・英語）と②ICTを活用する授業に関して協議が行われました。①では、各教科の共通する課題として、論理的に考えたり、知識を活用したりする力の育成に課題があることを確認しました。また、その根底にある基礎知識の定着に課題があることについても共有し、各教科の改善方法について検討しました。②では、教員のICT活用指導力の向上が課題であることを確認し、ICT活用に関する具体的な情報を共有しました。

【特別支援教育コース】「『校種間連携』における引き継ぎの現状と課題」というテーマのもと、院生と参加された方々の意見や感想を関連させながら協議を行いました。引き継ぎ資料の作成には、これまでの支援歴を具体的に記載することが必要であり、提供した支援の蓄積を意識していくことが、校種間に限らず学年間や支援会においてもスムーズな引き継ぎとなります。その蓄積された情報が、児童生徒に対する合理的配慮として提供される場合もあるため、丁寧かつ確実に行うことが重要であると意見が出されました。一方で、進学先の学校生活において、表出された困難な状態が、引き継がれた支援内容と異なることがあった場合、状況に応じて前籍校に相談できるような学校・教員間の継続的な連携をもつことも必要です。これら引き継ぎに関わる内容は、基本的に教職員間のコミュニケーションの部分も多く関わっているため、教職大学院を修了した教員が、情報の発信者、実践者として活躍していくことも重要と確認されました。

まだまだコロナ禍という厳しい状況下ではありましたが、個々の院生の研究が、高知県の教育課題解決はもとより、令和の日本型学校教育の構築を目指した取組の先導役となり、それが高知県の子どもの知・徳・体の調和のとれた成長につながるであろうという期待が多く寄せられました。

次回の「第8回土佐の皿鉢ゼミ」は、2022年2月11日（祝）開催予定です。

発行者：高知大学大学院教職実践高度化専攻長 柳林信彦  
 編集者：教職実践高度化専攻総務係・ニューズレター委員  
 発行日：2021年9月10日  
 事務局：教職実践高度化専攻附属学校教育研究センター  
 〒780-8520 高知県高知市曙町2-5-1（教職大学院係）  
 TEL 088-844-8457  
 E-mail ks33@kochi-u.ac.jp